

浄土

monthly JODO

11

2018
November

貧乏童

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



直径 85ミリ、厚み 10ミリ。写真下の裏側の上部には男瓦につながる凸部が残っている

この軒丸瓦は原宿・代々木公園ケヤキ並木で不定期に開かれる大江戸骨董市で見つけた。ブルーシートの上にぼつんと置かれていた。三十代と思しき若い店主に、これはどこから出たものだろう、と訊いたがわからないという。もちろんいつの時代のものともわかわずがない。最近では若い人のあいだでも骨董がブームのようで、若い骨董屋がよく市に品物を並べている。経験を積んだ年配の店主であれば、適当なウソも交えてあれこれ答えてくれるのだが、この手の若い店主は古美術や骨董の知識がない。知識がないのはこちらも同様だが、やはり商いの専門家としての話も聞きたいし、それを手がかりに調べていくこともできるのだが、「おもしろいでしょ」と店主は言う。おもしろいのはわかっている。だから買おうかという気になっているのだ。勉強したりするのは苦手で、感覚だけで商売をやっているのかもしれない。

軒丸瓦とは「鑑瓦、花瓦、巴瓦、端丸瓦」という。軒先など屋根の縁端を飾るために丸瓦の端に瓦当と呼ばれる円形の飾板をつけたもの。中国では、戦国時代に半円形の瓦当のある軒丸瓦が出現し、漢代から円形瓦当のものが現れた。漢代の軒丸瓦の瓦当は文字や獣手文、動物文で飾られたが、南北朝時代から蓮華文裝飾が出現し、その影響は朝鮮半島にも波及した。日本では、飛鳥時代に百濟系、高句麗系の単弁蓮華文裝飾が現れ、奈良前期から複弁蓮華文のものが使用された」とブリタニカ国際大百科事典にはある。

東京・国分寺市の武蔵国分寺跡資料館には、出土した瓦が約一〇〇点展示されている。入手した瓦のことがわかるかもしれないと出かけてみた。軒丸瓦（ここでは鑑瓦と呼ばれる）をはじめ、軒先瓦、男瓦、女瓦、鬼瓦、文字瓦と展示の瓦は多岐に渡っている。中でもやはり軒丸瓦と軒平瓦（字瓦）に施された文様は、のびのびとした筆致で見ていて気持ちがいい。

私が入手した瓦は九葉弁蓮華文なのだろう、素朴な文様である。装飾をほどこした外区も周縁もないし、中房は単純な丸で蓮子もない。まるで幼児が描いた花である。そして小さい。直径が八五ミリである。国分寺市教育委員会発行の図録「住田古瓦コレクションの世界」に収録されている軒丸瓦の直径は、一四〇ミリから一八〇ミリが多数を占める。この小さな瓦は、もしかすると本堂や鐘樓の屋根ではなく、塀の上部や庇に葺かれたものかもしれない。

浄土

2018/11月号 目次

法然上人を慕う	松原泰道	2
連載 響流十方	林田康順	12
連載小説 渡辺海旭⑨②	前田和男	16
連載 江戸の川を歩く②⑤	森 清鑑	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイヴ ― 一九九三年七月号

法然上人
を慕う(抄)

松原泰道

煩惱を断てとは告^のらず

乱れたる心もゆるし

人間の性^{さが}のまにまに

みほとけの国に

往^ゆき生^いく

この道は誰かひらきし

慕わしの 情けある

われらが祖師や

ここに掲げたのは、法然上人をたたえる今世紀の勝れた詩人、佐藤春夫氏（一八九二―一九六一）の作詩です。私がいつの頃から、何かの雑誌で読んでノートに写しとったので、いま改めて彼の詩集について調べる暇がないのは申しわけありません。しかし上人を敬慕してやまなかつた彼の心情が、この短い詩篇に濃やかに詩^{うた}われています。結びの「われらが祖師や」とある「祖師」は申すまでもなく法然上人です。

詩人で念仏者の佐藤春夫氏の詩をよく味わっていくと、法然上人の教えが、私たちの胸の中に何の抵抗もなく注ぎこまれていきます。彼がいうように「煩惱を断て」と、上人は決して「告らず」おっしゃったことはありません。

ある人が「酒を飲むは罪にて候か」と問います。上人は答えて「まことは飲むべくもなければ、この世のならい」と（『百四十五箇条門答』）。

何という温かい教えのお答えでしょう。私はかなり以前に歌舞伎座で演劇の「法然」を観劇したことがあります。法然上人にだれが扮していたか、俳優の名は忘れましたがすばらしい名演技でした。舞台には武士や町人、男女老若の群衆が上人のお説法を聞きのがさじとひしめています。

「まことは飲むべくもなければども、この世のならい」——という上人の意外な一言に群衆のさざめきが起こります。観劇席でも低い笑いの声が聞こえました。舞台では、泥だらけの農夫とも思われる質問者が、ほっとした面持で上人を見上げます。上人はにこやかに掌を合わせて「南無阿弥陀仏」と称名なさると、群衆のさざめきが収まって口々に念仏を称えます。

私はそのとき、かつての私の師から教えられた「流れに随したがつて流れに任まかせず」という禅語を思い出しました。私たちは社会生活を営む限り社会の流れに随したがわねばなりません。しかし流れのままに流されてしまつては、人間として生きる意味が無いでしょう。そこで流れに身を任せながら、しかも流れに任せない生き方が大切になります。

そのためには、つねに教えを聞き、大いなるいのちに守られている事実を信じることです。

佐藤春夫が、

乱れた心もゆるし

人間の性さがのまにまに

みほとけの国に

往き生ゆきいく

この道は誰かひらきし

と、法然上人の教えをたたえるゆえんです。

余談ですが、今はどこへ行っても道路が直線的に整備されましたが、数年前までは曲りくねった道ばかりでした。その頃、目的地へ行く方向がわかりかねて土地の人に尋ねると、「この道をまっすぐにいらつしやい」と教えられることがあります。といって定規じょうぎで線を引いたように直線的に進め、ということではないでしょう。曲った道は曲ったままに曲りにしたがっていくことです。人生でも同じです。教えを信じるから、方向が違うのではないかという心配もなく、教えられたままに、安心してこみ入った、ときには遠まわりの曲りくねっている道をたどって、毎日の生活を送ることができるのです。

私たちは日常の衣食住に些かの不自由もなく、後継者の子ども等も成長すると、「これで先ず安心」とほほつとするものです。しかしあつてはならぬことです。が、無常の人生ですから、いつ何が起きるかわかりません。生活や家族に恵まれたからといってそれで安心というわけにはいきません。やはり心の安らぎを得ないと、一身上の大きな事件に出会ったとき自分を失ってしまうことがあります。

仏教は、信心や修行によって得られる安定した心の状態を、あんじん(安心)

と、特に濁音で呼びます。法然上人は、安心を得たいのなら、つまり心の安らぎが欲しいのなら「すべてをさし置いて、南無阿弥陀仏とご名号を称えよ」とお教えます。すなわち「念仏ねんぶつ為先いせん（念仏を先きとす）」のすすめです。上人はさらに言葉すすめて「間断なく常に念仏の行を修めることが、そのまま阿弥陀仏のご本願に合致する。また時間の長短を問わずお念仏を続けることが、正しく定められた往生極楽のための実践である」と申されます。

かつて藤吉慈海法主（当時、鎌倉光明寺ご晋山）が、

口に南無阿弥陀仏と称えることに、何の宗教的意味があろう、と疑う人も多い。しかし真理はきわめて単純であつて、口に南無阿弥陀仏と称えてい
るうちに、それは静かに降りてくる白雪のように、いつのまにか下界を銀
世界にしてくれるのである。学問も知識もない老婆でも、南無阿弥陀仏、
南無阿弥陀仏と称えているうちに、身心ともに浄化されて仏菩薩のような
心になって行くのである。そこに本願の不可思議な力がはたらいている。
念仏体験の世界と言うべきであらう。

〔大法論〕四十一卷五号）

とお話されたことがあります、本当に法主のおっしゃる通りです。

数年前に、長野善光寺の大本願で私どもの会の行をいたしました。その年は
例年になく暑熱の厳しい夏の日が続きましたが、そのときとくに設定していた
だいた別時念仏行の感激は今なお鮮烈に身体に遺のこっています。汗ですっぱ抜け

そんな木魚の柄えを握りなおし握りなおして、高声念仏をかなり長時間続けました。高声で称名を続けるうちに、藤吉慈海法主のお話のように、私どもの心中が透明になっていくのを覚えます。はじめのうちは声も小さく「私が称名している」という自我意識を感じましたが、木魚の音が冴え高声になるにつれて自我意識がいつの間にか「南無阿弥陀仏」の称名に昇華されていました。念仏行を終って部屋に戻ったとき、ふと法然上人の「いけば念仏の功つもり」のお言葉が頭の中に浮かびました。

雑誌「大法論」が昭和四十九年五月号で「法然上人開宗八百年」の特集号を発行しましたが、編集後記に相応する巻末のコラム欄「脚下照顧」で、編集者が次のように記しているのも印象的です。

法然上人に牽れるのは、その永い生涯は戦争反対。仏教の平和主義で貫かれていたことだ。戦争反対で生きぬくことのむずかしさは誰でも知っている。それを敢えて守りぬけた上人は、なみなみならぬ素質をもった宗教者であつたことを物語っている。

法然上人（幼名勢至丸）が、九歳といういまなら小学生の年齢で大切な父の時国ときくにが、他者のために命を奪われます。当時の社会通念からすれば、時国は勢至丸に復讐を托すべきです。しかるに時国は「敵を恨むな、恨みを恨みで返すなら、永劫に恨みの果てることはない。恨みを解脱するの道を求めよ」と言い

遺すのです。

幼年の勢至丸が、哲理に満ちた父の遺言をどの程度理解されたかはわかりません。しかし父の願いが勢至丸の心に深く根をおろし、彼の成長と共に、父の願いが仏の無限大の誓願に彼の心中に充ち満ちたであらうことは想像されます。

勢至丸が法然と改名されたのは、ただ名前の変更に止まるものではありません。勢至丸の心中に生まれながらに備わっていた仏のいのちの開発かいはつが示唆されます。恨み心を解説するだけでは不十分です。恨み心を逆縁としてさとりを求める菩提心に転じて仇敵を幾重にも温かく包んで、はじめて仇も怨みも仏心に接摂されるのです。修行時代の上人が、私たちがとても想像できないほど『一切蔵經』をくり返し身読されたのも、仇を恨む心を仏心に昇華する教えを得たいからです。そして『法句經』五番の、

うらみごころは かなるすべをもつともうらみを懷くかぎり うらみの
止むときなし うらみを超えてのみ うらみは消ゆるべし

の詩句に出合われたとき、上人は、きっと亡父との邂逅の感激を感じられたでしょう。そして「うらみを超える」大菩提心を観念ではなく、真実わが身に備えるにはどうしたらいいか、と次から次へと起こる難問を解きほぐして、ついに専修念仏の道をお開き下されたのでありましょう。このことは、後に法然上人が、

たがひに順逆の縁むなしからずして、一仏浄土のともたらむ(『黒谷上人語灯録12』)

と、述べられたことで教えられます。また法然上人の父漆間時国が幼い勢至丸に遺した一言を、改めて日本人の心にめざめさせたのは、昭和二十六年サンフランシスコで開かれた太平洋戦争講和会議におけるスリランカ大統領ジャヤワルデネ氏(当時セイロン蔵相)が、前記した『法句経』の詩句を引用して、対日賠償求権の放棄宣言でありました。

ジャヤワルデネ氏の一言が、敗戦で絶望状態にあった私たち日本人に、感謝の念と共に大きな希望を与えてくれました。ユネスコ憲章に「真の平和は、一人一人の心が平和にならなければ得られない」とあるそうですが、一人一人の心の平和と言いかえると、他を恨む心を解消し合って生きていくことでしょう。同じく『法句経』に、

うらみをいだく

人びとの中に

慈悲ぶかく

うらみなく

生きんかな

(一九七)

とうたわれます。先の法然上人の「順逆の縁むなしからずして、一仏浄土の

ともたらむ」とのお心にも通います。

話を転じますが、太平洋戦争中に強制的に金属回収が行われました。あらゆる金属を回収して兵器に再製するため、大は銅像・つり鐘から、小は障子やふすまの引手・蚊帳をつる蠟ろうにいたるまで供出を命じられました。ただ文化財や歴史的由緒ある金属製品は回収から除外されましたが、多くの小学校の校庭に置かれて児童たちから尊崇されていた二宮金次郎像もまた供出させられたのです。

京都知恩院境内に奉安されていた勢至丸さまのいたいけな像も、金属回収令で供出しなければなりませんでした。しかし幸いにも戦後になって、お像は無事に知恩院に戻ったと聞いております。お像の容積の小さかったこともあるでしょうが、それ以上に幼い勢至丸さまの合掌のたたずまいが関係者の胸を打つたといえます。いまハンマーで打ち砕こう、いま溶鉱炉に投げこもう、とする職務上とはいいながら心の荒々しい人も、恨み心なく可愛い両手を合わせて拝む無心な童子像に心を揺さぶられたのではあります。勢至丸さまのお像の破壊作業は順に後回しになり。そのうちに終戦になって、お像は無事にお戻りになった、と伺って私も感動いたしました。合掌そのままだが念仏ねんぶつの相で、合掌そのままだが念仏の声と存じます。

詩人の坂村真民さんは、私たちの手のはたらきをたたえて、

両手を合せる

両手で握る

両手で支える

両手で受ける

両手の愛

両手の情なさけ

両手を合したらケンカもできまい

両手に持ったら壊こわれもしまい

一切衆生を両手に抱け

と詩われます。一句一句に深い心がこめられていますが、第一句と結句とをつなぐと、「両手を合せる 一切衆生を両手に抱け」となります。つまり両手を合わせる合掌が、そしてお念仏が、すべての人を抱きとるのです。坂村真民さんは、一遍上人の心からの信者です。先の佐藤春夫さんの詩と合わせて読むと、法然上人の教えが、また一段と身近に感じられます。二人の念仏詩人の作品を誦しつつ、この稿を結びます。

〔南無の会〕会長

ただかまえておなじ仏のくににまいりあいて、蓮のうえにてこの世のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をもちたり、たがい未来の化道けどうをもたすけんことこそ、返す返すも詮せんにて候べき。

〔正如房へつかはす御文〕

私もあなたも阿弥陀さまの同じお浄土へ往生してそこで出会うのだということをよくよく心得て、蓮の台たいでこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの因縁について語り合いましょう。そして、再びこの世界に還り来て、共に一人でも多くの人々を教え導くことこそ大切なことなのです。

俱会一处・還相回向の叶うよろこび―かけがえのない大切な方々と共に―

平成八年、伝統ある『浄土』に畏れ多くも三十代になりたての私達三人が新コーナーを与えられました。「御法語に聴く」から「響流十方」へとシリーズ名は変わりましたが、あれから二十三年が過ぎました。いろいろなテーマを書き連ねてきましたが、私の原稿の多くが俱会一処や還相回向の叶うお浄土のありがたさや尊さをテーマにしたものでした。

大学時代、浄土宗僧侶を志して学んでいた私には、多くの葛藤がありました。そんな葛藤の中、私の前に立ちふさがるもっとも大きな課題が「死」の恐怖であり、「死別」の悲歎でした。そんな私の不安を真の安らぎに導いてくれたのは法然上人がお示し下さったお浄土でした。

命ある私達にとつて、自身の「死」とかけがえない大切な方々との「死別」ほど辛く悲しいことはありません。そうした辛さや悲しさを軽減する営みがさまざまに語られこそすれ、自分自身の力だけではそれらを断ち尽くすことなど到底不可能でありましょう。法然上人は、こうした厳然たる事実から決して目を逸らすことなく、こんな私達の悲しみを真に癒し、悟りを開くことができる世界を求め続けて下さいました。

そして、『阿弥陀経』に説かれる「俱会一処——この世界での命を終えた後、

極楽浄土においてこの私とかけがえのない大切な方々との再会が叶う―」という教えにその答えを見出されたのです。

法然上人はお浄土での俱会一処の喜びを次の和歌に託されています。

露の身はここかしこ消えぬとも 心は同じ花の台ぞ

（朝露のように儚いこの私の今生の命は、いつでも息絶えることになるかは分かりませんが、あなたの心と私の心は、必ずやまた阿弥陀さまのお浄土の蓮の花の台で再会いたしましょう。）

冒頭のご法語において法然上人は、お浄土での再会について「あんなこともありましたね、こんな話も交わしましたね」と懐かしく語り合うことができるとお示しです。だからこそ私達は、先立たれた大切な方々とお浄土での再会に向けて、二度と訪れることのない日々を大切に過ごし、一つでも多くの思い出話を作っておくことが大切なのでしょう。

そして、そのお浄土は、今、現に私たちが生活している世界と断絶しているわけではないことを、法然上人は次の和歌に託されています。

生まれてはまず思い出んふるさに 契りし友の深きまことを

（お浄土に往生したならば、まずは思い出そうではありませんか。この姿

婆世界というふるさとで其々にお念仏を称え、浄土往生への契りを交わした、あの友の深いまことの心を。」

このように阿弥陀さまのお浄土は、私達が浄土往生を遂げた暁に、この娑婆世界に残してきた大切な方々のことを思い出すことができ、さらに、その方々のもとに還り、そのそばで見守り続ける還相回向が叶う世界なのです。なるほどこの世界は厭うべき迷いの世界ですが、法然上人の和歌にあるように、大切な方々との思い出を育んだ、懐かしい「ふるさと」でもあるのです。

法然上人は、こうした俱会一処や還相回向の叶うお浄土であるからこそ、私達は仏道実践に励み、速やかに悟りを開くことができる と確信し、縁を結んだ人々にお念仏を称えて浄土往生を目指すようにと説き続けられたのです。

生まれがたき浄土に往生せんこと、よろこびの中のよろこびなり。

（『一紙小消息』）

お念仏の相続を通じて、そんな尊いお浄土に往生が叶うことを「よろこびの中のものよこびなり」と受けとめることができた時、私達の心は真のやすらぎに包み込まれることになるのです。

二十三年間、本当に、本当にありがとうございました。

（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十二回

第三部

充実と稔りの白秋へ

いざ、浄土宗労働共済会の立ち上げへ



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティ口カが存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、残された海旭は母トナと導きの師・端山海定逝去の悲報に耐えながら博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへ、ドイツ駐節日本大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、海旭は悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合った満蒙の外交官・北条大洋と再会、大アジア主義に共感を覚える。そして、いよいよ十一年ぶりに祖国の土を踏むといきなり「大逆事件」に遭遇。今後の身の処し方を思索するなか、盟友の高島米峰の依頼で「新仏教」に創作童話「釣龍爺」を発表する。

「頭脳の人」から「実践の人」へ

渡辺海旭も同人である『新仏教』の編集長・高島米峰から懇請され同誌に執筆寄稿した創作童話「釣龍爺」は、一般の読者にはさほどの反響はなかったが、友人や宗門関係者には強い関心を呼んだ。そもそも「金龍」とはなんの寓意なのか。いったい海旭はこれから何をするつもりなのか、留学生活で得たものはどう生かすのだろうか……。

多くの関係者、とりわけ宗門首脳からは、海旭が「浄土教報」主筆に復帰し、浄土宗をふくむ有力仏教諸宗派の最高学府である宗教大学の教授になったことで、いずれ海旭は仏教界における頭脳の中の頭脳になるであろうと期待されていた。

帰国すると、海旭はさっそく新しい動きを様々はじめたが、そのなかで昔からの友人と宗門首脳を戸惑わせたのは、「浄土宗労働共済会」という社会事業の立ち上げであった。

この「浄土宗労働共済会」がなぜ海旭ゆかりの人々を戸惑わせたのか？ それは、「頭腦の人」と目されていた海旭が、「実践の人」たらんとしたからだった。

海旭が帰国した明治四十三年は、宗祖である法然上人七百年忌を翌年に控えており、宗門では様々な記念事業が企画されていた。しかし、その多くはその年限りの催事で、宗務事務所につめて机にむかって企画をたて指令をとばすだけという、形だけの事業であり、宗門首脳もどこかでそれでよしとするところがあった。

しかし、せっかくなら宗祖も納得してくださるような、後世にも残る事業はできないのか。海旭はそう考えて、浮かんできたのが、地元の深川で、貧窮者のための無料職業紹介所と宿泊所を開設することだった。

救貧化に拍車をかけた「日韓併合」

これ进行い立ったのは、散歩がてらに、自

坊・西光寺のある深川から生まれ育った浅草にかけて路地路地をくまなく歩いてみて、窮民たちが住む地域が増え、生活状態もむしろ酷くなっている印象をもったからだ。また、これは海旭が帰国した年の韓国併合によるものと思われるが、朝鮮半島からやってきた人々が増えて、集団で生活をし、ここの貧窮状況も見ると、ロシアとの戦争にも勝ち、ときから比べると、ロシアとの戦争にも勝ち、製鉄などの基幹産業も起こり、国力はあがったはずなのに、底辺の人々の救貧ぶりはなんだ、いったいこれはどうなっているのだ。地元の寺としてもなんとかしなければならぬ。そう海旭は思い立って周囲にアイデアを求めると、「海旭先生、そんなことは耶蘇の専売ですから、耶蘇にまかせておけばいいではありませんか」という者もいたが、海旭は言葉を荒らげて「こ、これこそ仏教の仕事だな、なんとしてもやらねばならない」と宣言したのが事のはじまりだった。

海旭は、ドイツ留学時代に社会主義者やキリスト者たちによるセツルメント運動「労働者の家」^{クワイハイム}を実践的に学んでおり、それを日本で生かしてみたいという自負があった。

思い立ったら、身体が勝手に動いていた。さっそく西光寺から歩いて十分もかからない名利、両国回向院の住職、本多浄厳に持ちかけたところ、ぜひわれらの地元でやろうと乗ってきた。思えば回向院は、海旭が師とあおぐ福田行誠が住職をつとめた寺であり、これも仏縁だと海旭は感じ入った。

海旭は「下級労働者生活状態の改善及び之が慰藉と理想的薫陶」を目的とする「浄土宗労働共済会」を立ち上げ、深川に無料職業紹介所と宿泊所を開設することをもって、法然上人七百年忌記念事業の目玉とすることを宗門に働きかけて認められた。仏教系ではこれほどの規模と中味の「社会事業」はおそらく初めての試みだった。

こうして海旭は、「浄土宗労働共済会」に

のめりこんでいった。ドイツでもそうだったが、萩原雲来とは対照的で、日がな一日書斎や研究室にこもっているのは苦手だった。途中で表に出て人と交わり、とくに集りを組織するのが得意で、それが活動のエネルギー源だった。とにかく動きまわっていると元気がでる。これはもって生まれた習性なのだと海旭は改めて気づかされた。

七年で二十二万人の「細民」を救済

西光寺に寄宿する門下生を総動員して準備にかかって一年余の七月一日、ついに深川区西平野町に浄土宗労働共済会宿泊所が開所した。以下が当初の概要である。

・仕事もなく家もない貧窮細民は、五錢を前納すれば、蚊帳と寝具二枚が支給されて毎日入浴と宿泊できる。

・食事は十五錢で三食が用意され、仕事があるものには携行用の弁当箱が貸与される。
(ちなみに当時の一錢であんぱんが買え

五銭では山手線の初乗りができた。

・毎日夜八時になると、講堂の仏前に全員が集まり、勤行の後、十時までは自由時間とし、新聞雑誌を読んだり囲碁将棋などをして過ごすことができる。

・失業者にはまず雑業に就かせ、ついで定職が世話されて、貯金が奨励された。

・特筆すべきは、診療所と病室を付設、花柳病専門の医師と労働者健康診断の医師を常駐させていることだった。

浄土真宗大谷派の慈善協会から創刊された『救済』（明治四十四年八月号）は、浄土宗労働共済会の概要を説明したうえで、

「現今我国に於ては、慈善事業の数四百有余なるにもかかわらず、職業紹介労働者保護事業は其数極めて稀れであるという。本会の創立は、正に其時を得たものというべきである」と賛辞をおくっている。

なお、開所当日の宿泊者は百三十五人であったが、年末までのべ宿泊者数は約一万

九千、のべ飲食給与数は約四万九千食、定職に就いた者は五百六十五人、施療施業者三百三十四人、貯金扱い高千四百八十円。さらに開設七年後の大正六年度の実績は宿泊者三万六千人強、開設時からの累計は約二十二万人にも達した。

以後、「浄土宗労働共済会」は、簡易食堂や授産部なども設け、宿泊救護・職業紹介・慰安・教化活動を兼ね備えた労働者の総合支援施設へと充実をとげていく。特筆すべきものを以下に列記すると――

・大正元年五月、社会問題・労働問題の対策を研究する「仏教徒社会事業研究会」を設置。

・大正三年、東京州崎の大火で、浄土宗労働共済会が罹災者の救済にあたり、これに対し内務省から奨励金五百万円が下附される。

・大正十年、商工業者師弟の職業訓練指導を目的とする深川商業学校を設立。

・大正十一年、朝鮮人教化施設、明照学園設立。

この朝鮮半島からの貧民に対する救済事業は、仏教によるそれとしては先駆的試みであり、この明照学園の設立意義について渡辺海旭は次のように述べている。

「一宗の扶助を受けず、独力明照学園を開き、仏教会に於ける内地最初の鮮人学校を造り、労働者教育の設備を創めたことは、たとえ規模が五十人を容るゝに過ぎざるものなるにもせよ、特筆に価することと思う」と珍しく自賛し、近隣の朝鮮人労働者を集めて官民共同の懇話会をもったことを「確に将来ある計画と称してよい」と言い、さらに、「実の所、吾人は吾々の兄弟に対し尚内地鮮人と云うが如き差別的名称を用いざるを得ざる現状を哀むものである。日鮮融和などという常套語は第一義から見ると余りに水臭い」と自戒している。

なお、労働共済会では、正月の元日二日に

千食の雑煮の炊き出しをしているが、日本人も朝鮮人も区別なく接待され、当時深川枝川町にあった朝鮮人居住地からも大勢がやって来た。

東大教授・姉崎正治の来訪

こうして仏教界に先駆けた社会事業「浄土宗労働共済会」の充実に海旭はますますのめりこんでいったが、身体を動かし、人をつなげるために飛びまわって、楽しくてしかたがなかった。もちろん社会事業の推進者としては「楽しい」だけではすまされない。なんのためにやっているのかの大義名分が必要であった。

あるとき、留学中は金の無心で世話になった東京帝大教授の姉崎正治が視察かたがた訪ねてきて、「浄土宗労働共済会」の話になるや、いきなり「きみの社会事業というのは矛盾していないか」と言われて、海旭は不意をつかれてたじろいだ。姉崎はつづけた。「きみは、

桂内閣の内政について、『浄土教報』や『新仏教』などで、こう提言しているようじゃないか。いわく、社会の組織は益々複雑を増し、経済状態は急変激烈にして貧富の差が甚しい。下層の人々の生計は悲惨を極めて、いまこそ、社会主義の蔓延を防ぐため、政府は極力労働問題の解決に努力せよと」

「し、しかし、いくら社会政策・感化救済事業を奨励しても」と海旭は言った。「せ、政府は不況対策でそれどころではない。やれない。いや、やる気がないのかもしれない」

姉崎が受けた。「だったら、政府の替わりにやってやろう、それがきみが全力を傾注している労働共済会というわけか」

「そ、そのとおりだ」と海旭は笑みを浮かべて頷いた。

「では、きみに問おう」と姉崎は返した。「なぜ政府の替わりを仏教がしなければならないのか。これについては、すでに仏教界にも批判があることは知っているだろう。きみと同

じ新仏教の同人の杉村楚人冠は、慈善は人の財を奪う『弱盗』だと言っている、すなわち楚人冠のいう慈善とはきみの社会事業、労働共済会ではないか。また、東大の宗教学の高楠順次郎君などは、仏教の慈善はキリスト教の模倣で仏教の真理から出ていないと断じている。さあ、きみの明晰なる反論をきこうじゃないか」

海旭は背筋を伸ばすと姉崎の目を見据えた。「よ、要は、現代社会に求められる宗教とはなにか、だ。神学的宗教、教会的宗教は無用だ、牧師や僧侶を育てるだけの宗教も無用だ。社会生活に即した宗教こそが実に時代の要求する宗教というべきだ。その点、ば、僕は、ヨーロッパの宗教、つまりはキリスト教は貧富のすぐれた調整者であることを目の当たりにして、日本では仏教徒こそこれを担うべきだと考えている」と海旭は言っで一息入れた。「仏教は本来生活即宗教であって、利楽有情だの衆生恩だのという他教には類の

ない飛び切りの社会道德、公共道德の根基を有しているではないか。その立教の根底において現代社会の規範となり、社会問題を解決するための思想上、実行上の基準を示すものということができる。これぞ大乘仏教の精神さ」

「よし、わかった」と姉崎は議題を転じた。「仏教が社会事業をすることの大義名分は認めよう。しかし、矛盾があるぞ。それは労働運動、社会主義運動とのかかわりだ。きみは留学先のストラスブルクから僕に手紙をくれたことを覚えているか」と言つて手紙をさしだした。

海旭が懐かしそうに読み終わるのを待ってから、姉崎はつづけた。「つまり、おぬしは、日本政府は社会主義者をうまく活用しろ、そうすれば社会の悪弊は取り除かれて風通しがよくなり、ひいては国のためになるといつている。だったら貧窮者救済は社会主義者にやってもらえばいいではないか。なにもわが仏教徒がやらなくてもいい。これが第二の間

いだ。きみの怜悯な反論をきこう」

「そ、その答えはこうだ」と海旭は応じた。「に、日本の社会主義者はだめだ。たのむにたらずだ。大逆事件でそれは証明されたと思う。いまや彼らは政府の妄庄をうけて、細々と生き延びるのが精一杯だ。貧民にとって大変なときには、自分たちのことで精一杯だ。ドイツのように社会主義者がセツルメントをやるような状況にない。だからこそわが浄土宗労働共済会がやるしかないのだ」

「なるほど、きみには負けたよ。といつても理屈ではなくきみの情熱にだ。頑張ってくれ。僕も微力ながら応援させてもらうよ」

姉崎はそう言つて、財布から一円札を数枚抜き出すと、「これは寸志だ」と言い置いて、帰つていった。

(つづく)

江戸の川
を歩く

第二十五回

江戸ウォーカー

森清鑑

本所・深川の河川

きたじっけんがわ

北十間川

堅川と大横川と同様、江戸城から見て縦横に流れる川が北十間川と横十間川（十間川、南十間川）である。北十間川は、隅田川（大川）と中川を東西横一線に結ぶ河川で位置は本所の北側にある。大川、水戸屋敷の南沿いを流れる源森川がそのまま中川に向かって横一線の流路。

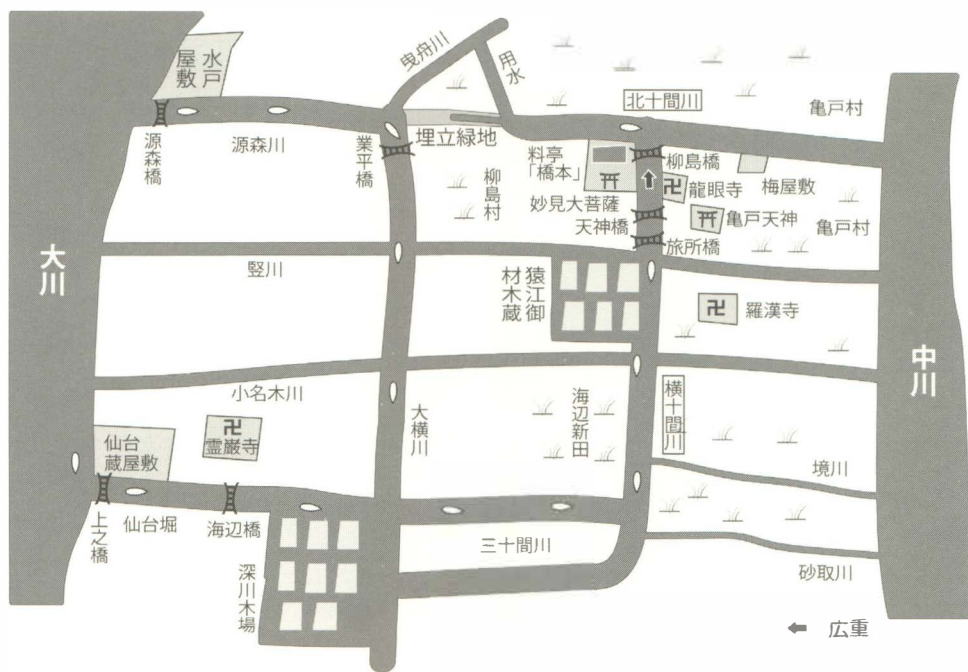
北十間川も明暦の大火（一六五七）後の本所開発に伴い一六六三年に開削された農業用水路で、工事責任者は堅川と同じく徳山重政、山崎重政の両名。しかし、その後、大川増水時に源森川から入ってくる洪水の被害が度々、発生したために、一六七二年、源森川の先を一部埋立て、くの字に南に曲げ、洪水

を大横川に流すようにしたのである（現在は直通）。

それでは、江戸時代の北十間川を辿ってみよう。源森川が直ぐ終わり、右に業平橋。正面、埋め立て地をちよつと歩く。周囲は、小梅村の田圃。すぐに細い流れがある。この流れに北の曳舟川から取った細い農業用水が加わる。柳島村。すると右側に妙見大菩薩、法性寺がある。江戸つ子に愛され、通称、妙見様。右に、南へと下る横十間川が見える。

北十間川は、妙見様から、文字通り、幅十間（十八メートル）に広がり、東へ直進。周囲の風景が、柳島村の田圃から亀戸村の田に変わると、右に梅屋敷が見え、まもなく中川に出る。北十間川は農業用水路として開削されたが、次第に物資運搬路（材木など）、遊覧客の運搬路としても利用されるようになる。

本所・深川
北十間川・横十間川



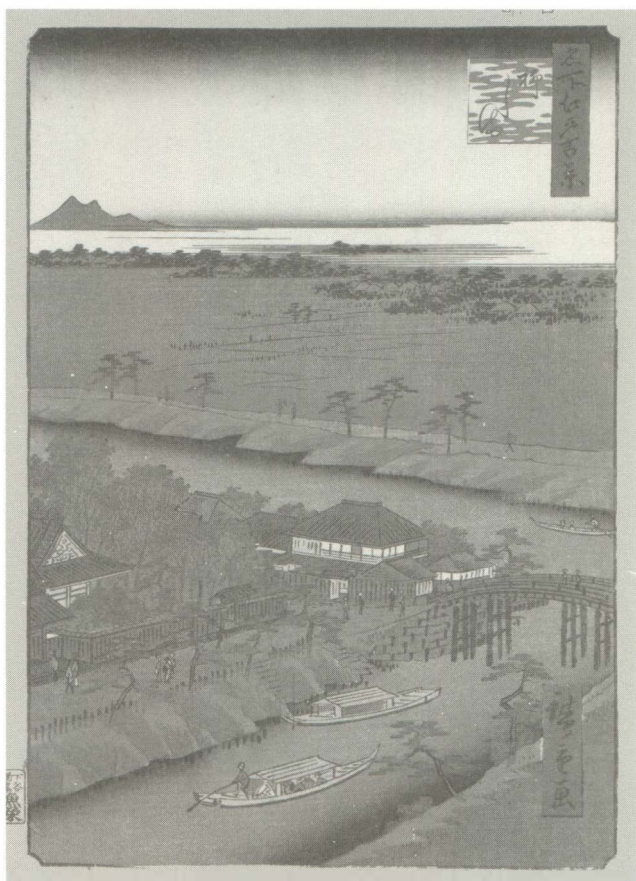
南十間川 (十間川)

北十間川の妙見様を右に曲がれば横十間川。曲がり口に柳島橋（又兵衛橋）が架かっている。潜って南に一直線に降りる川が横十間川。これも江戸城から見て横に流れるからついた名。柳島橋のたもとに有名な料亭「橋本」があった。懷席料理で有名な風格ある店である。妙見様参詣と「橋本」の味を目指して多くの人々が江戸から横十間川を上がってくる。大賑わいである。風光明媚。広重はここを描いている。柳島橋のたもとに遊覧船が着く。土手の石段を登ると妙見様の赤い堀。参拝。次に右隣の料亭「橋本」へ、といった案配。前を見ると北十間川、その先は広々とした田園、そして筑波山を拝むことができた。広重の先

輩、葛飾北斎も妙見様の熱烈な信者で、ここで靈感を授かって雅号「北斎」を名乗るようになったという。また歌舞伎役者、初代中村仲蔵も妙見様に日参し、あの忠臣蔵、定九郎の役作りのヒントを得たという。落語、「中村仲蔵」。それまで忠臣蔵五段目、定九郎は、どてら姿の、山賊の出で立ちで、さえない。話しもつまらないので当時の観客は、弁当を広げる始末。この役を宛がわれた、仲蔵はこれを見せ場にするにはどうしたら良いか、必死に考える。そして妙見様に願をかける。満願の日、途中で雨に降られ、「そばや」で雨宿り。そこへ、いなせな浪人風の武士が駆け込むなり、蛇の目傘の滴をばつと払う。月代の滴を拭い、そのかつこよさ。これは妙見様のお告げだ。彼は妙見様に飛ぶように行くと満願を果たし、浪人そっくりに役作り。当日、この場面になると客はいつものとおり、弁当を出し、ざわざわ。そこへ、いつもと違う身なりの定九郎が水をばたばた垂らしながら駆

けだしてくる。そして見栄を切り、たった一言、「五十両」。そのかっこよさ。客はシーンとなる。「どうだいあの定九郎は」。大評判。忠臣蔵を代表する名場面に変貌したのである。

横十間川を南に下る。左に秋寺として有名な龍眼寺が見え、右側は、小大名の抱え屋敷が連なる。過ぎると、左に弘前藩津軽越中守の広い屋敷。続いて有名な亀戸天満宮。そこ



広重：柳しま 左、堀で囲まれた妙見様。絵の中央、横に流れる北十間川。絵の下、縦に流れる横十間川。柳壺橋を渡ると料亭「橋本」。絵の左上、遠くに筑波山が見える。

に架かるのが天神橋。潜ると、川沿いに亀戸町人町の家並み。そして旅所橋^{たびしょ}。目の前に豎川が流れている。豎川を突つ切つてさらに南に下る。すると右側は、全て広い「猿江御材木蔵」。広大な網の目のように貯蔵池が張り巡らされ無数の材木が浮かんでいる。そして家康が最初に掘削した、小名木川に出る。したがって、小名木川から入り、横十間川を北上、妙見様や亀戸天満宮に参詣するという江戸っ子が多かったようである。

深川、仙台堀 —三十間川—

小名木川から南は、江戸湾の浅瀬、埋立てにより造成された町であるから、上から見下ろせば、正に、張り巡らされた川（堀）の間に町が浮かんでいるといった光景である。東

洋のベニスの感。江戸時代日本を訪れた外国人は、イタリア、ベニスの景観と重ね合わせ、その美しい景色に見とれることになる。

仙台堀

再び、舟に乗り、大川を南に下る。左、小名木川の入り口に万年橋が見える。大川の中央に中州が広がり、ここも風光明媚な光景で、月夜の名所。小名木川を過ぎると深川清住町の町並みに続いて仙台藩伊達家の蔵屋敷がある（五千四百坪）。ここは、いわば、伊達藩の物資貯蔵所である。その南縁を東へと流れる川が仙台堀である。開削は寛永年間（一六二四〜四四）と言われ、幅約二十間。当初は、おいしい仙台北米や建築用木材を蔵に運ぶために掘削されたものである。舟を仙台堀に入れる。上之橋を潜る。川の両岸には仙台北河岸が続く。左を見ていくと、仙台藩蔵屋敷に続いて大名の下屋敷があり、久世大和守（千葉）

下屋敷で終わる。すると海辺橋。そこからは、広大な靈巖寺と子院の屋根が連なっている。これが終わると亀久橋に出る。ここまでが仙台堀で、これから先は川幅三十間になり、名称も三十間川に変わる。右側に、広大な材木貯蔵場、深川木場の光景が展開し、過ぎると、

浜川崎橋。大横川にぶつかる。さらに新田を突っ切って南北に流れる横十間川まで。これが三十間川である。そして仙台堀、三十間川の右一帯、つまり江戸湾までの景観が網の目のように運河が張り巡らされた正に東洋のベニスと呼ばれる風景なのである。



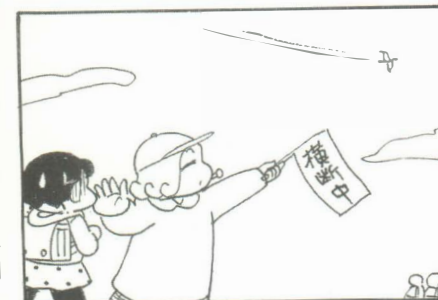
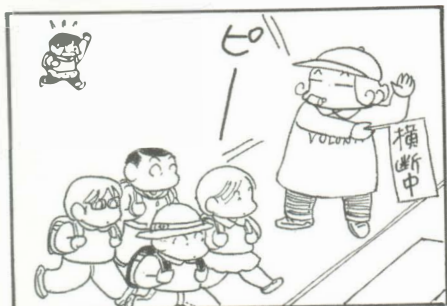
妙見様の賑わい。

さっちゃんねネッ

かまちのひろ



155 かい目



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

野分過ぎネズミの死がいを片付ける 岱潤

新聞にこんなコラムがあった。アメリカ

の心理学者が卒業アルバムを使い、変わった研究をしているという。卒業アルバムの写真は何百枚と集めて、その笑顔を分析する。笑っているかどうか。それは満面の笑みか、笑顔の度合いと写真の人物の結婚生活を検証してみたところ、あまり笑っていないかった人の離婚率は、満面の笑顔の人の五倍にもなったそうである。あくまでもアメリカ人を対象にした調査で、日本人に当てはまるかどうか疑問だとしているが、おもしろい結果だと思う。学生時代が楽しかった人、楽し

く学生時代をおくれた人、その人はその後の人生も順調におくっているということなのだろうか。

学生時代何が一番大事か。勉強か、身体作りか、いろいろな意見はあるだろうが、友達作りという意見に賛同する。勉強もスポーツもある意味スキルの話で、いい友達と出会うこと、それが全てのような気がする。阿含経に出てきたこんな話を思い出す。釈尊と弟子の会話で、弟子が「いい友と出会うことは悟りのどのくらいを達成したと言えるでしょうか」との問いに、釈尊は、「それは悟りの全てだよ」と答えている。学生時代これを読んで、驚いて目が覚めたことを思い出すが、い

い人物との出会いは、その人の人生にとって何事にも代えがたい大切なことだということだが、歳を取るとわかってくる。同窓会を楽しめることは、幸せなことである。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十四卷十一月号 頒価六百円
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成三十年十月二日
発行 平成三十年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇一
東京都港区芝公園四丁目四番地四階

発行所 法然上人讃仰会

電話 〇三三三・五七七八・六九四七
FAX 〇三三三・五七七八・〇三三六
振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・順行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(岡岡・回向院)
松濤彦彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三季請)、関西版(四季請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

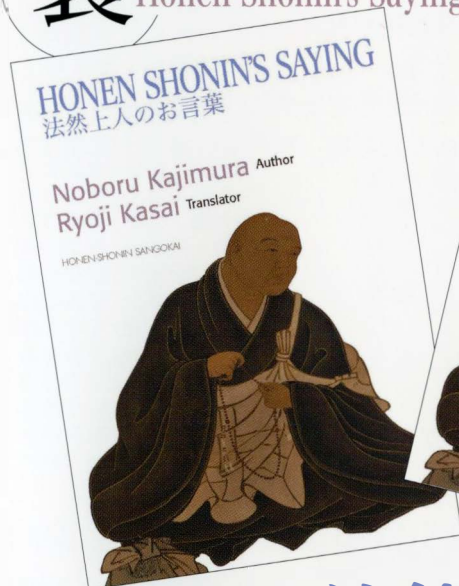
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊浄土の連載が 単行本になりました。

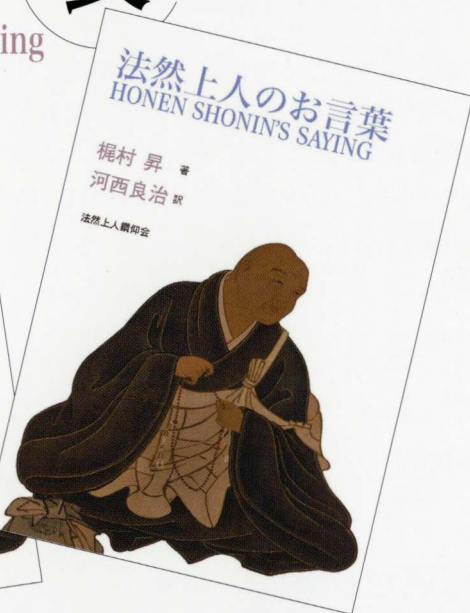
裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying



表

右開きで和文の
ご法語



和英対応法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。
外国の方のお土産にも最適です。

A5判・124ページ 頒価 1,000円(税別)

法然上人讃仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人讃仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。